

CD
付き

音楽家
ものがたり

音楽に人生を捧げた仕事人

新井鷗子(著)

バッハ





9784276228030

ISBN978-4-276-22803-0

C8073 ¥2200E



小学中級から



1928073022004

定価 (本体 2200 円 + 税)

• バッハを知ろう!

身長は?



作った曲は?



趣味は?



性格は?



家族は?



CDあり

07 杉並区立西荻図書館
☎ 3301-1670



0717332357

▶▶▶ さあ、
見てみよう!

CD付き
音楽家
ものがたり



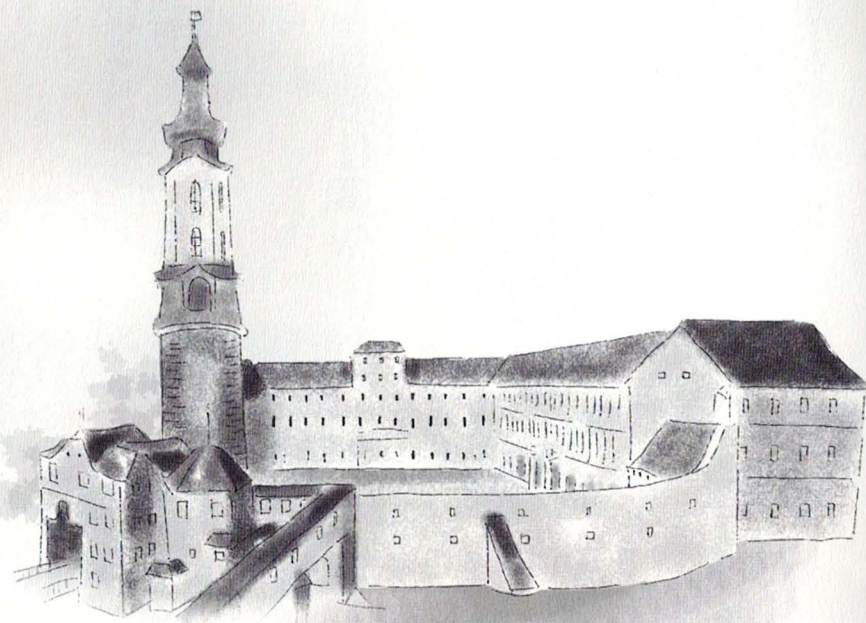
バッハ

音楽に人生を捧げた仕事人

あら い おー こ
新井鷗子(著)

音楽之友社

人生のすべてを音楽の仕事に捧げ、
 神を讃美し、家族を愛し、生活を守り、
 社会と闘いぬいたバッハ。
 つらいとき、願うとき、愛するとき、
 人は祈らずにはいられません。
 バッハの音楽はあなたの祈りです。



CDで聴ける バッハの名曲

歴史に残る名演奏で、バッハの名曲を聴いてみましょう！

演奏する人で、
 音楽も変わるよ！

- ① 主よ、人の望みの喜びよ ▶ [p.59] [p.7, 8]
 指揮：カール・ミュンヒンガー／シュトゥットガルト室内管弦楽団
- ② 2声のインヴェンション 第1番 ▶ [p.44] [p.8]
 ピアノ：近藤嘉宏
- ③ シャコンヌ ▶ [p.47] [p.8]
 ヴァイオリン：ヘンリク・シェリング（※この曲のみ収録時間の関係で約4分でフェードアウトしています）
- ④ 平均律クラヴィア曲集 第1巻 第1番 前奏曲 ▶ [p.44] [p.9]
 ピアノ：ヴィルヘルム・ケンプ
- ⑤ 小フーガト短調 ▶ [p.9]
 オルガン：ヘルムート・ヴァルヒャ
- ⑥ マタイ受難曲よりアリア「憐れみ給え、わが神よ」▶ [p.63] [p.10]
 アルト：ヘルタ・テッパー／指揮：カール・リヒター／ミュンヘン・バッハ管弦楽団
- ⑦ G線上のアリア ▶ [p.72] [p.10]
 指揮：カール・リヒター／ミュンヘン・バッハ管弦楽団
- ⑧ ブランデンブルク協奏曲 第5番より第1楽章 ▶ [p.42] [p.7, 10]
 指揮：リッカルド・シャイー／ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団
- ⑨ トッカータとフーガ 二短調 ▶ [p.25] [p.7, 11]
 オルガン：カール・リヒター
- ⑩ 目覚めよと呼ぶ声が聞こえ ▶ [p.7, 11]
 テノール：アントニー・ロルフ・ジョンソン／
 指揮：ジョン・エリオット・ガーディナー／イングリッシュ・バロック・ソロイスト
- ⑪ 無伴奏チェロ組曲 第1番よりプレリュード ▶ [p.51]
 チェロ：ミツシャ・マイスキー
- ⑫ 「音楽の捧げもの」より6声のリチェルカーレ（ウェーベルン編）▶ [p.82]
 指揮：ピエール・ブレーズ／ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
- ⑬ カンタータ第12番「泣き、嘆き、憂い、おびえ」より第2曲 ▶ [p.38]
 指揮：カール・リヒター／ミュンヘン・バッハ管弦楽団&合唱団
- ⑭ コーヒー・カンタータより「コーヒーのおいしさったら」▶ [p.71] [p.7]
 ソプラノ：エマ・カークビー／指揮：クリストファー・ホグウッド／エンジェント室内管弦楽団

[p.~] は本文、[p.~] は巻末付録でその曲が出てくるページです。

CDで聴ける
バッハの名曲 2

子ども時代 6

バッハ家の仕事

バッハとキリスト教

自立への道 15

兄をたずねて

兄からの旅立ち

はじめての就職



仕事から仕事へ 28

転職、そして結婚

宮廷に仕える

名声のひろがり

喜びと悲しみ 41

宮廷楽長バッハ

愛する妻の死



バッハの進撃 50

トーマス教会のカントル

カントルの仕事

週一曲のカンタータ



人生の終わりに 79

音楽の捧げもの

目の手術、そして死



苦難つづきの毎日 63

マタイ受難曲

カフェでの音楽会

ライプツィヒの日々



バッハを知ろう! 裏表紙より

子ども時代

アイゼナハ

バッハ家の仕事

バッハは、音楽の仕事をする家に生まれました。

お父さんも、おじいさんも、ひいおじいさんも、おじさんも、おおおじさんも、ひいひいおじいさんの兄弟も、ヴァイオリンを弾き、教会のオルガンを弾き、町の楽団でラッパを吹き、讃美歌の指揮をして、作曲をして、チェンバロを教えたり、楽器を作ったり修理したり、みんな音楽の仕事をしていました。バッハにとって音楽は「家の仕事」でした。

バッハ一族には先祖代々五十人くらいの音楽家がありますが、わたしたちがもつともよく知っているのは、ヨハン・セバスチャン・バッハです。

一六八五年、ヨハン・セバスチャン・バッハは、ドイツ中部テューリングン地方の町アイゼナハに、八人兄弟の末っ子として生まれました。町の人口はおよそ六千人。白い壁に三角四角の図形を描く木組みの家が並び、町はずれのけわしい丘の上にはヴァルトブルク城という古いお城がそびえ建ち、その向こうにはテューリングンの森が広がっています。

「さあ、今日も行ってくるぞ。」

バッハのお父さんは、町に雇われている「町の音楽家」。役所の塔の上で朝十時と夕方五時にラッパを吹いて、町内に時間を知らせるのが毎日の仕事です。また教会の礼拝で歌ったり、ヴァイオリンを弾いたり、祭りの音楽を作ることもありました。アイゼナハは音楽の盛んな町だったのです。

「お父さん、ぼくたちのご先祖さまも音楽をやっていたんだね。」

「そうだ、セバスチャン。でも大昔はパン屋だったんだよ。ひいひいひいお



1685年～
0歳～

※【讃美歌】キリスト教(プロテスタント)の神さまや聖人をたたえる歌。

※【チェンバロ】鳥の羽軸などで作られた爪が、金属の弦をはじいて音を出す鍵盤楽器。

じいさんは水車で粉をひきながら、チター※を演奏して歌っていたんだ。パンはお腹のごちそう、音楽は心のごちそうってわけだ。」

当時、町の音楽家は身分の低い職業でしたが、バッハは先祖代々受けつがれてきた音楽の仕事を誇りに思っていました。

バッハは五歳くらいから学校でドイツ語の読み書きを学び、八歳でアイゼナハの聖ゲオルク教会付属のラテン語学校に入学しました。学校の教科書は聖書や讃美歌集。聖書の教えを学ぶ授業のほかに、裕福でない子どもは聖歌隊に入って礼拝で歌うことが定められています。

教会では日曜の朝と午後に礼拝があり、水曜と木曜と土曜にも礼拝があったので、バッハは礼拝の合間をぬって学校の授業に出席しました。

バッハの声はとても美しいボーイソプラノ※だったので、いつも聖歌隊のメンバーにひっぱりだこです。



※ [チター] 指で弾く弦楽器 (弦鳴楽器)。

※ [ラテン語] 古代ローマの言語で、ヨーロッパで学術語として使われた。

※ [ボーイソプラノ] 声がわりをする前の男子の高い声。

「セバスチャン、今夜あの家の葬式で歌ってくれ。あさっては向こうの教会で結婚式がある。そっちも頼む！」

「あぁなんて忙しいんだ。友だちと遊ぶ時間もないや。」

そんなバッハの楽しみは、歌ってお小遣いをもらうこと。聖歌隊は週に二回、家を一軒一軒まわって玄関の前で讃美歌を歌い、お小遣いをもらうことが許されていたのです。

「聖歌隊のみなさん、清らかな歌をありがとう。生まれてすぐ死んだ我が子も、これで天国に行けるでしょう。少ないお金だけれど、受け取ってね。」

「ありがとうございます。」

少年たちの澄んだソプラノの歌声は、町の人たちの喜びや悲しみに寄りそいます。バッハはもらったお小遣いをお父さんにわたして家族の生活を助けました。

家に帰ればお父さんからヴァイオリンを習い、空いた時間にはお父さんの

いとこで聖ゲオルク教会のオルガニストだったヨハン・クリストフ・バッハの演奏を見学しました。

こうして、音楽の仕事をする家に生まれたバッハは、朝から晩まで音楽づけの日々を送りました。

バッハとキリスト教

今日は年に一度、バッハ一族の集まる日。ドイツ中部のあちこちにいるバッハの親戚が集まって、音楽の仕事の情報交換をするのです。

「あの教会のオルガニストの席がもうすぐ空くそうだ。」「あの町では聖歌隊の指導者を募集中だ。」「あの宮廷楽団はオーボエが足りないって。」

最初はまじめに仕事の話をしていますが、何しろ全員音楽家ですから、あつという間に合唱や合奏が始まります。

「さあ、讃美歌を歌おう！」

一人が「♪神は我がやぐら〜」と歌い出すと、もう一人がそこに高い音の別のメロディを重ね、もう一人が低い音の別のメロディを重ねます。するともう一人が別の歌詞でメロディを歌い出し、さらにもう一人がまた別の歌詞をつけて歌い、いろいろなメロディや歌詞をまぜこぜにしてハーモニーを作るのがバツハ家のならわしでした。

ときにはすぐくユーモラスな歌詞が入り、もとの讃美歌が何だったのかわからなくなるほどでした。幼いバツハは、大人たちの音楽遊びに早く加わりたいと思いました。

バツハ家でよく歌われていたのは、神学者マルティン・ルターが作った讃美歌です。キリスト教には大きく分けて、カトリックとプロテスタントという二つの派があり、バツハ家は、ルターが宗教改革で開いたプロテスタントに属していました。バツハが通う聖ゲオルク教会付属学校はルターの母校で

※[カトリック] 初代キリスト教会の正統を継ぐとされている教派。

※[プロテスタント] キリスト教のなかで、カトリックから分かれた教派。
ルターの宗教改革(1517年)によって成立する。



もあります。

バッハは、ルターを深く尊敬していました。

キリスト教の聖書は主にラテン語で書かれていましたが、ルターはラテン語が読めないドイツの民衆にもわかるように、聖書をすべてドイツ語に訳したのです。さらにドイツ語で歌える親しみやすい讃美歌（コラール）※をたくさん作曲し、礼拝の中心に「音楽」があると考えました。

「ぼくもルター先生のように、音楽で神さまをたたえたい！」

そんなある日、バッハのお母さんが突然亡くなってしまいました。上の兄や姉は家から独立していて、お父さんと十三歳の兄ヨハン・ヤーコプとバッハが残されました。

さらに不幸なことに、その半年後にお父さんも死んでしまったのです。バッハは九歳で、両親を失いました。

自立への道

オールドルフ・リューネブルク・アルンシュタット

兄をたずねて



1695年～
10歳ごろ～

残されたバッハと兄ヨハン・ヤーコプは、一番上の兄ヨハン・クリストフに引き取られることになりました。ヨハン・クリストフは、アイゼナハから東南に三十五キロほどの町オールドルフの聖ミカエル教会でオルガニストを務めています。給料は少なく、前の年に結婚したばかりで赤ちゃんも生まれる予定でしたが、一族で助け合って生きるのがバッハ家のしきたりでした。

「ヤーコプ兄ちゃん、足が痛いよ。」

「もう少しだ、セバスチャン頑張つて。」

馬車に乗るお金もないバッハと兄ヤーコプは、まだ雪が残る道を歩いてオ

※[コラール] キリスト教ルター派（プロテスタント）のドイツ語による讃美歌。

ールドルフに向かいました。



「やあよく来たね！ セバスチャンはまだ赤ん坊だったときしか知らないけれど、大きくなったな！」

ヨハン・クリストフは、弟たちをあたたかく迎えてくれました。

オールドルフは人口二五〇〇人ほどの小さな町でしたが、教会付属の優れたラテン語学校があり、二人はそこに通いました。しかし年上のヤーコプは兄に迷惑をかけたたくない、次の年にはアイゼナハに戻り、町の音楽家として働き始めます。

一方バッハはオールドルフに残りました。ヨハン・クリストフから習うチェンバロやオルガンが楽しくてしかたなかったのです。

ヨハン・クリストフは、「パッヘルベルのカノン」で有名な作曲家パッヘルベルの弟子で、バッハ家の歴史に残る鍵盤楽器の名手でした。そんな彼は弟セバスチャンを、自分なりにもっとも良い方法で教育しようと思いました。「兄さん、もっと難しい曲を弾きたいな。」

「だめだ。今はちゃんと練習曲をさらいなさい。」
バッハのチェンバロの腕はみるみる上達し、兄が与えた楽譜をすぐに弾きこなしてしまいます。

「兄さん、教会のオルガンを弾かせて。」

「だめだ。もっと体が大きくなってからだ。」

「じゃ、本棚の奥にあるオルガンの楽譜を見せてよお。」

「だめだ。おまえにはまだ早い。」

バッハは、鍵のかかった本棚にあるパッヘルベルなどが書いたオルガンやチェンバロの楽譜をどうしても見たいと思いました。

「そうだ！ みんなが寝ている夜中にこっそり楽譜を取り出そう！」

深夜、バッハはむくつと起き上がり、本棚の格子戸のすきまに細い手を入れて楽譜を一枚ずつ抜き取り、月の光を頼りに音符をひとつひとつ書き写しました。電灯もコピー機も写真もない時代、楽譜は自分の手で五線紙に書き

写すしかありません。

月が出ない夜もあれば、眠くて起きられない夜もあり、それでもバッハは六か月かけて楽譜を全部写し終わりました。バッハは嬉しくて、うっかり兄が家にいるときに写した曲を弾いてしまいます。

「おや、その曲は……？　こら！　セバスチャン、奥の楽譜を見たのか？　だめだと言ったじゃないか！」

「兄さん、ごめんなさい。」

「まあいいだろう。聖ミカエル教会のオルガンを弾かせてやるから、ついておいで。」

「えっ、ほんとう!?　わーい！」



兄からの旅立ち

「セバスチャン、うちも子ども三人をかかえて生活に余裕がなくなってきた。おまえの才能を伸ばすためにも、ここを出て広い世界に学びに行きなさい。」

「兄さん、わかりました。ぼく、リユーネブルクに行きます。」

ちようと担任の先生がバッハに、リユーネブルクの聖ミカエル教会付属のラテン語学校を紹介してくれました。この学校の少年合唱団のオーディションに受ければ学費がタダになり、少しだけ給料をもらえるそうです。バッハは勉強の成績も良く、美しいボーイソプラノの声をしていたので、合格する自信がありました。そして何よりも、尊敬するオルガニストのゲオルク・ベームがこの地で活躍していたのです。

「ヨハン・クリストフ兄さん、お世話になりました。行ってきます！」

十四歳のバッハは同級生のエルトマンと二人で、一七〇〇年三月十五日、オールドルフを旅立ちました。

ドイツ北部の都市リユーネブルクまで三百キロの道のり。東京から名古屋までとほぼ同じ距離です。二人は毎日ひたすら北に向かって歩きました。励まし合い、神さまに祈り、夢を語り合いながら、てくてく、てくてく歩きました。

そして四月。十五歳になったバッハはリユーネブルクに到着。リユーネブルクは塩の産地として栄えた大都市です。バッハは計画どおり聖ミカエル教会付属のラテン語学校に入り、少年合唱団での活動を始めました。

「♪アーイーオーウー、あれっ？ ♪アー、ゲホッ、ゲホッ」

ある日のこと、いつものように発声練習をすると声がかすれてしまいます。

「おかしいな、風邪でもひいたかな。」

次の日も、高い声を出そうとするとガラガラ声になってしまいます。

ああ……ついに来てしまった。声変わりです。

「どうしよう、もう合唱団にいられない。学費ももらえなくなる。」

しかしバッハの才能は歌だけではありません。教会の先生はバッハにオルガンやヴァイオリンを弾かせたり、音楽の仕事を割り当てました。またバッハは学校の図書館にある大量の楽譜を片っ端から写して勉強し、自分でもオルガン曲を作るようになります。

「立派なオルガニストになりたい。」

バッハはときどき、リューネブルクから五十キロ北の大都会ハンブルクに、教会のオルガン演奏会を聴きに出かけました。ハンブルクでは最先端のオルガン音楽が盛んに取り上げられ、フランスやイタリアから入ってきたオペラも上演されていました。

さまざまな音楽を吸収して、バッハは十七歳になります。

「ぼくは大学に進まないで就職する。バッハ一族がそうしているように。」

はじめての就職

十八歳になったバッハは、アルンシュタットにいました。アルンシュタットは、故郷アイゼナハに近いテューリンゲンの森の入りにあり、たくさんの泉が湧いています。人口三八〇〇人の町の人々の生活のなかには、いつも教会とその音楽があります。

バッハは、アルンシュタットの新しい教会に設置されたオルガンの前で、ドーム型の天井に届く何本もの長いパイプを見上げて言いました。

「これでパイプもストップ（オルガンの音色や音量を変える栓）の調整もばっちり。明日はいよいよお披露目だ。」

幼いころからオルガンが身近にあったバッハは、オルガンの音楽だけでなく楽器の構造にも詳しく、アルンシュタットの町から「オルガンの鑑定と初

演奏^{えんそう}』という大役^{たいやく}を命^{めい}じられたのです。

バッハの演奏^{えんそう}は人々の心をつかみ、十八歳^{さい}の若さ^{わか}でアルンシュタットの新しい教会のオルガニストに就任^{しゅうにん}しました。

「神^{かみ}さま、念願^{ねんがん}のオルガニストになりました。これから精進^{しょうじん}してよい音楽をたくさん作り、神^{かみ}さまをたたえることを誓^{ちか}います。」

独身生活^{どくしん}には充分^{じゅうぶん}すぎる給料^{きゅうりょう}をもらい、初めて自分^{はじ}が独占^{どくせん}できるオルガンを手にしたバッハは、本格的^{ほんかくてき}なオルガン音楽^{おんがく}の作曲^{さく}にとりかかりました。有名な「トッカータとフーガニ短調^{たんちよう} BWV565」※もこのころに書かれたと言^いわれています。

オルガニストの仕事^{しごと}は礼拝^{らいはい}の音楽^{おんがく}を作ることでしたが、ついでにバッハはラテン語学校生の聖歌隊^{せいかたい}の指導^{しどう}も任^{まか}されてしまいました。この聖歌隊^{せいかたい}は不良^{ふりよう}の集まりで、授業^{じゅぎょう}はサボる、先生^{せんせい}には逆^{さか}らう、騒^{さわ}いで暴^{あば}れる、合唱^{がっしやう}どころかほとんど学級崩壊^{がくきゅうほうかい}の状態^{じょうたい}です。

▶ CD9



ある日、バッハが仕事から帰る途中のこと。

「おう、バッハ大センセ、昨日はずいぶんと恥をかかせてくれたじゃないか。」

「きみのファゴットが下手だから、ヘタクソと言っただけだ。」

「なに？ もういつペン言ってみろ！ バッハ、バッハッハ、バーカ！」

「なんだとおー！」

つかみ合いの喧嘩が始まりました。生徒は棒でなぐりかかり、バッハも短剣を抜いて、あわや血を見る大乱闘。仲間がどうにか間に入って止めましたが、その後バッハは教会から呼び出されて怒られ、一方的に悪者にされてしまったのです。

「もうこんなところにいたくない！」

ふてくされたバッハは、北ドイツの都市リユーベックで活躍するドイツ最高のオルガニスト、ブクステフーデのコンサートを聴きに行こうと思い立ち、

一か月の休暇を申し出ます。

リユーベックは、アルンシュタットから北に四百キロ。バッハは今回も歩いて向かいました。往復するだけで四週間近くかかりますから、そもそも最初から一か月で帰る気などなかったのでしょう。

リユーベックの聖マリア教会で、六十八歳のブクステフーデの演奏を聴いたバッハは、ドラマチックで変化に富んだハーモニーに衝撃を受けます。

「ブクステフーデ先生の後任として、リユーベックで就職できないだろうか。」

チャンスを探っているうちに、三か月のときが流れました。

実は、聖マリア教会のオルガニストになるにはブクステフーデの娘と結婚する、という条件があったのです。バッハにはその条件を受け入れられない理由がありました。アルンシュタットに、恋人マリア・バルバラを残してきていたのです。

仕事から仕事へ

ミュールハウゼン・ヴァイマル

転職、そして結婚



1707年～
22歳ごろ～

一か月の休暇を四か月近くも勝手にのばして、バッハはアルンシュタットに戻りました。教会の委員たちはかんかんに怒っています。

「バッハくん、教会の仕事を何だと思っているんだ!？」

「わたしは音楽家として非難されることは何ひとつしておりません。」

バッハは反省するどころか開き直り、ブクステフーデの影響を取り入れたオルガン曲を作って次々と発表しました。教会に集う人たちは、知っている讃美歌のメロディが、バッハのオルガンの超絶技巧やドラマチックな響きによって自由に変化していくのを聴いて、最初はびっくり、でもその魅力にぐ

いぐい引きこまれていきました。

「バッハくん、なんだこの耳ざわりな音楽は！ 普通に弾きなさい！」

教会の委員たちは、暴走するバッハの音楽を止めなければ！ と厳しく注意を繰り返します。

ちようどそのころ、中部ドイツの都市ミュールハウゼンの聖ブラジウス教会のオルガニストが亡くなり、次の奏者を募集中というニュースが届きました。バッハはすぐにミュールハウゼンまで試験を受けに行き、審査員の満場一致で合格します。

「ミュールハウゼンの聖ブラジウス教会のオルガニストに任命されましたので、ここを辞めさせていただきます。」

バッハはアルンシュタットの教会に辞表を出し、オルガンの鍵を返却して、ミュールハウゼンに向かいました。隣には、恋人マリア・バルバラがいます。

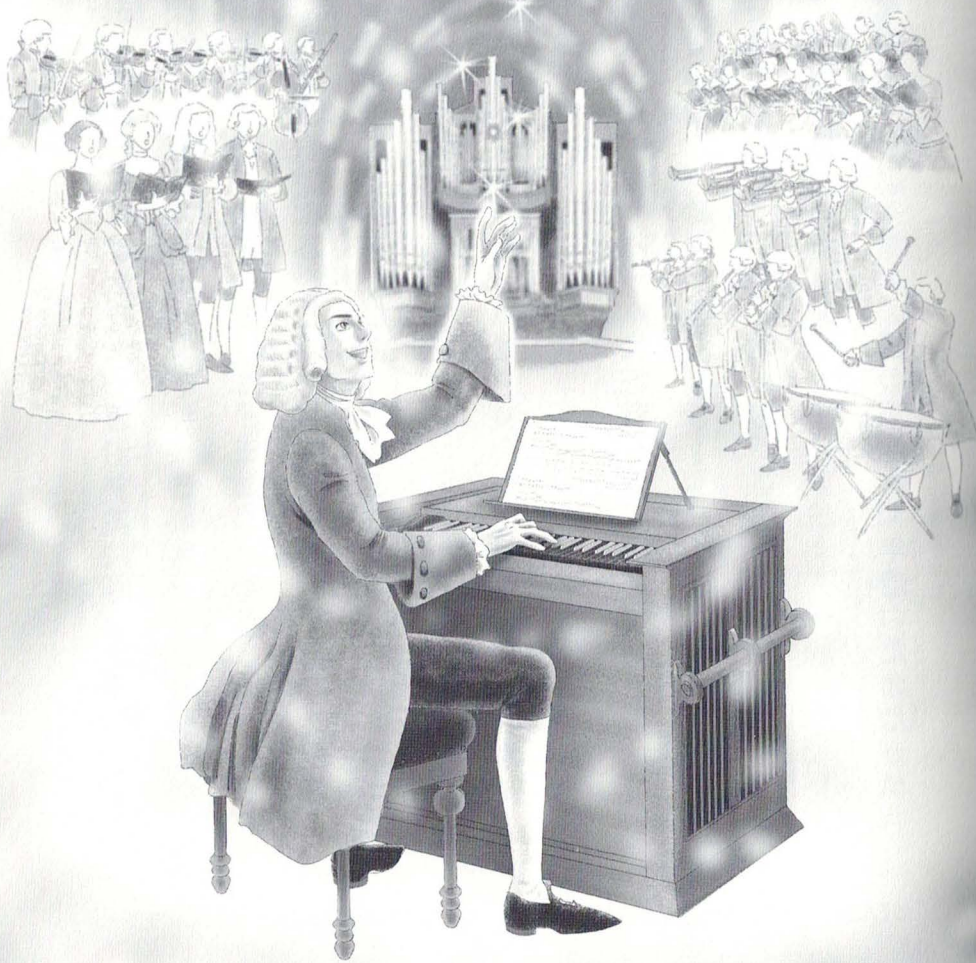
「セバスチャン、ごめんなさい。女性のわたしが教会の聖歌隊で歌ったことが、辞める原因のひとつになったのでは？」

「いや、たとえ禁止されていても女性のソプラノの声が必要だったんだ。音楽的に正しいことをしたまでさ。それに、仕事中也きみといたいからね。」

「ふふふ、セバスチャンたら。」

マリア・バルバラはバッハの遠い親戚のオルガニストの娘でした。二人は、小さなかわいらしい教会で結婚式を挙げました。

家庭を持った二十二歳のバッハ。最初の大仕事は、市議会のお祝いの席で演奏するカンタータの作曲です。トランペット三本、ティンパニ、オーボエ二本、リコーダー二本、ファゴット、チェロ、弦楽合奏、オルガン、ソロ歌手四人、合唱、という大編成のカンタータ「神はいにしえよりわが王なり」を発表しました。華やかでおごそかな音楽に、議員たちは大喜び。あまりに



※[カンタータ] 管弦楽の伴奏で、独唱や合唱をする大がかりな声楽曲。

好評で、当時としては珍しく楽譜に印刷されたほです。

さらにバッハは聖ブラジウス教会のオルガンをもつとスケールの大きいサウンドにするために、楽器の改造を提案しました。

「四つの古いふいごの送風を強くすること。」「ストップを増やせば豊かな響きが得られる。」「九十センチのパイプを外して、二メートル四十センチのパイプに変えれば全体の響きが調和するだろう。」

オルガンの構造を知り尽くしていたバッハは、教会の空間とオルガンの音響の設計技師でもあったのです。

ミュールハウゼンに来て一年。もうバッハは転職を考え始めていました。「これだけの仕事をしているのに、給料が低すぎる！ ぼくはもっと尊敬されていいはずだ！」

そのころテューリンゲン州のヴァイマル公国の宮廷が、年老いたオルガニ

ストの後任を探していました。「チャンスだ！」 バッハは、うじうじ迷ったリせず、思い立ったらすぐに決断して行動するタイプでした。

「ヴァイマルの宮廷からオルガニストに招かれましたので、ここを辞めさせていただきます。」

宮廷に仕える

ミュールハウゼンから八十キロほど離れたヴァイマルは、貴族のヴィルヘルム・エルンスト公爵が治める宮廷都市でした。これまでバッハは町の教会で働いていたので、宮廷で君主に仕えるのは初めてです。

宮廷では君主の一言ですべてが決まります。二十三歳のバッハをヴァイマルにスカウトしたのも、ヴィルヘルム・エルンスト公の鶴の一声でした。

「バッハくん、わが宮廷のオルガンの音楽すべてを任せる。頼んだぞ。」

※【ふいご】オルガンを鳴らすために、箱のなかのピストンを動かしてパイプに空気を送りこむ装置。

※【公国】貴族が治める国。

「はい、しっかり務めます。」

バッハの仕事場は、宮廷の“黄色い城”のなかの礼拝堂です。天井は三階建ての城のてっぺんまで高さ三十メートルの吹き抜けになっていて、そのてっぺんの穴の奥にある屋根裏部屋にオルガンと聖歌隊の席がありました。まさに天から音楽が降り注いでくるような造りになっています。

バッハは礼拝で讃美歌の伴奏をし、讃美歌のメロディを取り入れたオルガン曲を作り、コンサートを開いたりもしました。町の教会では市民にわかりやすい曲を演奏しなければなりませんでした。宮廷の礼拝堂には貴族とその他の関係者しか来ませんから、難しいテクニクや大胆なハーモニーを自由に使うことができません。バッハは「トッカータとフーガへ長調 BWV 540」など、オルガン曲の傑作を次々と生み出しました。

バッハの給料はどんどん上がり、バッハ家では毎年のように子どもが生まれ六人家族になりました。

バッハの音楽を愛するヴィルヘルム・エルンスト公は、非常に熱心なキリスト教ルター派の信者で、夜八時に宮廷を消灯して翌朝の礼拝にそなえるほどでした。熱心すぎて、宮廷のスタッフ全員に聖書の朗読をさせたり、礼拝のあとにテストをするなど、少し度が過ぎるところもありました。

「これでは息が詰まりそう。今日は“赤い城”に行こうつと！」

実はヴァイマルにはもう一人の君主がいたのです。ヴィルヘルム・エルンスト公の甥、エルンスト・アウグスト公爵です。彼は“赤い城”をかまえ、音楽とダンスと狩りが大好きで、自分専用のオーケストラを持ち、イタリアで流行しているヴィヴァルディやアルビノーニの楽譜を取り寄せて演奏させていました。バッハがそれに惹かれないはずはありません。

「バッハ。君を雇っているのはわたしだ。“赤い城”に行ったら罰金だ！」

“黄色い城”の君主はカンカンですが、バッハはそんなことおかまいなし。ドイツから外に出たことのないバッハは、“赤い城”で最先端のイタリア音

※[ヴィヴァルディ(1678年生まれ)／アルビノーニ(1671年生まれ)]

楽を体験します。

「なんて素敵な音楽なんだ！音が会話しているみたいだ！」

イタリアでは、独奏と合奏が華やかに対話をする「協奏曲」という形式が流行していて、バッハも早速「協奏曲」を書き始めました。またチェンバロやオルガンで一人でも弾けるように編曲した「協奏曲」を数多く作りました。

名声のひろがり

鍵盤楽器の名人バッハの名声はドイツ各地に広まり、教会や宮廷から招かれて演奏したり、オルガンの鑑定で呼ばれることも多く、それらはバッハの臨時収入となりました。

ある日、大都市ドレスデンの宮廷が、フランスの有名な鍵盤奏者ルイ・マルシャンとバッハとの「腕くらべ」をやりたいと言ってきました。

「よし、受けて立とう！」

負けず嫌いのバッハは、勇んでドレスデンに向かいました。

「マルシャン先生、あなたがどんなに難しい主題のメロディを出しても、わたくしは即興で演奏してみせます。」

いよいよ対戦当日。貴族の邸宅にチェンバロ二台が運び込まれ、紳士淑女たちが集まりました。落ち着いているかに見えるバッハの手のひらは、汗でびっしょり。しかし待てど暮らせどマルシャンはあらわれません。主催者は、マルシャンの宿に使いの者を行かせました。

「宿はからっぽでした！マルシャン先生は朝、馬車で発ったそうです！」
みんな哑然として、開いた口がふさがりません。

「みなさま、不戦勝は性に合いません。わたしの實力をお聴きください。」
バッハは用意していた曲を演奏し、みんなを驚きと感動の渦に巻き込みました。

人気急上昇のバッハを他の宮廷に取られては大変と、ヴィルヘルム・エルンスト公はバッハを「宮廷楽師長」に昇進させました。楽師長は月に一回、カンタータ作曲・上演しなければなりません。大がかりなカンタータを、毎月一つ書くのは大変なことでした。

しかしバッハは音楽の職人。気分がのらない日も体調が悪い日も、同じスピードで同じクオリティの曲を仕上げていきます。

「喜びをあらわすには上昇するメロディ。悲しみをあらわすには下降するメロディ。怒りをあらわすリズムは「タタタン」」。嘆きをあらわすには休符をはさむ。」

当時は、こうした表現のパターンを使って作曲するのが普通でした。現代のデジタル作曲アプリにも通じる作り方ですが、同じパターンを使っても作曲家の才能はちゃんとあらわれるものです。ヴァイマルでは、カンタータ第十二番「泣き、嘆き、憂い、おびえ」などのすばらしい作品が生まれました。

ある日、宮廷の音楽すべてを監督する宮廷楽長が亡くなりました。バッハは、「自分が次の宮廷楽長になるに違いない！」と期待しました。しかしヴィルヘルム・エルンスト公は、その楽長の息子を後任としたのです。

「ありえない！ なぜだ？ 宮廷のために優れた音楽を書いてきたのに！」たとえすばらしい音楽を作れたとしても、「赤い城」には遊びに行くし、出稼ぎはするし、言うことをきかないバッハに、君主は手を焼いていたのでしよう。

一方のバッハは、自分の音楽が正しく評価されないことに耐えられません。思い立ったらすぐに転職です。

「ケーテンの宮廷から楽長に招かれましたので、ここを辞めさせていただきます。」

ところが今回は、すんなりとはいきませんでした。ケーテンの宮廷をバッハに紹介したのは、「赤い城」のエルンスト・アウグスト公だったのです。

喜びと悲しみ

ケーテン

宮廷楽長バッハ

「宮廷楽長バッハ、うちのオーケストラを自由に使って良い音楽をたくさん作ってくれたまえ。」

「レオポルト様、しっかり務めてまいります。」

楽長……あついに自分が！ バッハはケーテンの宮廷の楽長になった喜びをかみしめていました。当時「宮廷楽長」は、町の音楽家や教会のオルガニストよりもずっと上の、音楽家にとって最高の地位にありました。バッハの給料も、ヴァイマルにいたころの二倍にはね上がりました。

ケーテンはヴァイマルから百キロほど北にある、人口二〇〇〇人ほどの宮



1717年～
32歳ごろ～

「黄色い城」のヴィルヘルム・エルンスト公の怒りは爆発。バッハを牢屋に入れてしまいました。

四週間の禁固刑。ようやく釈放されたバッハは、妻バルバラと四人の子どもたちとケーテンに向かいました。三十二歳の冬のことです。その後バッハは、九年仕えたヴァイマルの土を踏むことは二度とありませんでした。



廷都市です。ケーテンを治める君主レオポルト侯は、ヴィオラ・ダ・ガンバ（チェロの祖先）とヴァイオリンとチェンバロの名手で、美声の歌手でもあり、宮廷にすばらしいオーケストラをかかえていました。バッハは何人もの管楽器や弦楽器の名手たちを自分の手足のように使うことができたのです。レオポルト侯は、食事の音楽、リラックス用の音楽、舞踏会の音楽、客をもてなす音楽、誕生日の音楽、眠るときの音楽など、いろいろな目的に合う音楽をバッハに作らせました。

「そうだ、オーケストラのメンバーに腕の見せどころを作っただけよう！」
バッハは、トランペット、ホルン、オーボエ、ヴァイオリン、チェンバロなどをそれぞれ主役にした「ブランドンブルク協奏曲」を書きました。
なかでも第五番は、合奏ではいつも伴奏を受け持つチェンバロをソロ楽器としたユニークな作品です。きっとバッハは得意顔でチェンバロを弾き、超絶技巧を派手に決めたことでしょう。

「そろそろ息子たちにも、音楽の仕事を覚えさせなければ。」

バッハはもうすぐ十歳になる長男フリーデマンのためにチェンバロの練習曲を作ることにしました。

「さあ、まず鍵盤の上に手を置いて、ドミソの和音をおさえてみて。そしてそのまま指を順番に動かしてごらん。」

「わあパパ、和音が美しいメロディになった！」

「よしよしフリーデマン、いい子だ。これから毎日、この楽譜で練習しなさい。」

バッハは息子たちが上達のスピードに合わせて学べるように、曲を少しずつ追加していった、最後のほうに音名表、音楽記号の説明、装飾音の付け方、指づかいの表を付け、「ヴィルヘルム・フリーデマン・バッハのためのクラヴィーア小曲集」として一冊にまとめました。

こうして息子たちのために書かれた曲はのちに、「平均律クラヴィーア曲集第一巻」、「二声のインヴェンション」、「三声のシンフォニア」に収められ、今日ではピアノを習う者が必ず弾く曲となりました。



「バッハ、明日からカールスバートの温泉に行く。ついてくるように。」

「ははっレオポルト様！ すぐに準備いたします。」

弦楽器、管楽器、チェンバロまでを馬車に積みこんで、バッハ率いるオーケストラはボヘミア（現在のチェコ）のカールスバートにお伴しました。レオポルト侯は、温泉でゆっくりしながら音楽を楽しむのが好きだったので、CDもラジオもない時代、音楽といえば「生演奏」を丸ごと持っていくしかありません。

「バッハ楽長、おれたちも温泉に入りたいよ。朝から晩まで演奏し通して肩がコリコリだ。」

カールスバートは有名な温泉地で、ヨーロッパ中の貴族たちが観光や病気の治療に来ていました。バッハたちも仕事の合間に温泉に入って疲れを取りました。

愛する妻の死

カールスバートで一か月半ほど過ごし、ケーテンに戻ったバッハを、突然の不幸がおそいます。

「ママが、ママが……」

バッハの顔を見るなり、子どもたちが次々と泣き出しました。留守中、妻マリア・バルバラが三十五歳で急死していたのです。

「そ、そんな、まさか……」

すでにお葬式も終わり、もう顔を見ることもできません。バッハは泣きじやくる子どもたちを胸のなかに抱き、あまりのショックで現実を受けとめられずにいました。

不満ひとつ言わず、十三年間バッハを優しく支えてくれた妻。

「ああ神さま。わたしはどうしたら良いのでしょうか。」

胸が引き裂かれそうな悲しみのなかで、バッハは最愛の妻の死を音楽で追悼したいと思いました。そして、キリストの死と復活を歌う讃美歌のメロディを、ヴァイオリンが奏でる和音の内部にしのばせて、無伴奏ヴァイオリンのための「シャコンヌ」という曲を書きました。

誰かに聴かせるのではなく、何かのためでもなく、音楽のための音楽を作りたい。神さまだけが知っている音楽を。

バッハは、一人だけでひとつの音楽の世界を作る「無伴奏」という形式を極め、無伴奏ヴァイオリン、無伴奏チェロのための作品を書きました。それらはバッハの最高傑作となりました。

この場所は亡き妻の思い出ばかり。「残された子どもたちのためにも、気持ちを切りかえて前に進まなければ。」



「もうここにはいられない。」
バッハの心は、次の場所に向かって動き出しました。

バッハはハンブルクの教会のオルガニストの採用試験を受けに出かけました。ケーテンから北に二百キロ、バッハは三十五歳になっていましたが、若いころと同じ徒歩の旅です。

そこで素晴らしい即興演奏を披露し、審査員が全員一致しての合格。しかし、高額こうがくの寄付金きふきんを払はわなければオルガニストになれないことがわかり、バッハは自分から断ことわりました。

そのころ、ケーテンの宮廷では心配しんぱいなことが起こりつつありました。

「アナタ、あたし踊りたくないの。」

「食事しょくじのときの音楽がうるさいわ。」

「新しい楽器がっきを買うお金があつたら、あたしの指輪ゆびわを買ってちょうだい。」

レオポルト侯こうが迎えたお妃きさきさまは、大の音楽嫌きらいいだったのです。

舞踏会ぶとうかいや音楽会が次々と中止になり、オーケストラの人数もどんどん減へらされていきました。

バッハの進撃

ライプツィヒ

トーマス教会のカントル

「チェンバロは、壊れやすいからていねいに運んでくれ！」

「バッハ先生、この楽譜はどちらへ？」

「奥の本棚だ。あつ、せっかく順番に並べたのに入れ替えたらダメじゃないか！」

「バッハ先生、この脚は、テーブルにつければいいですね？」

「違う違う！ それはチェンバロの脚だよ!!」

バッハ家のたくさんの荷物を乗せた四台の馬車が、一七二三年五月二二日午後、ライプツィヒに到着しました。



1723年～
38歳ごろ～

二人の娘と三人の息子、そして新しい奥さんも一緒でした。バッハは、ケーテンの宮廷の歌手だったアンナ・マクダレーナと再婚したのです。

「あなた、お食事ができたわ。フリーデマンのチェンバロの練習も見ておきました。部屋の掃除は済んでいます。そうそう、楽譜の写しも終わりました。」

「ありがとう、本当に助かるよ。」

アンナ・マクダレーナは、バッハより十六歳年下の二十二歳。家事に子育てに音楽の仕事にと、夫を支えました。特に楽譜をきれいに書き写すことが得意で、彼女が写したバッハの「無伴奏チェロ組曲」の楽譜は、長年バッハ本人が書いたものと信じられていたほどです。

▶ CD11

バッハはライプツィヒのトーマス教会の「カントル」という職業につきました。カントルとは教会に付属する学校の先生のこと。生徒たちに合唱を指

導して礼拝の音楽を担当するだけでなく、ラテン語など学科の授業も受け持つことが義務づけられていました。

ここに来る前のケーテンでは、「宮廷楽長」という音楽家最高の地位に昇りつめたバッハ。なぜその地位を捨てて「学校の先生」になることを選んだのでしょうか。

それは、大都会で勝負をしてみたいと思ったからです。ライプツィヒは、ロシアやアメリカなど世界中から商人が集まり、「見本市」が定期的に開かれている商業の盛んな都市でした。当時の人口は三万人。今までバッハが住んだ町とは桁違いの大きさです。人が多ければ仕事も多くあり、弟子もたくさん取れるし、楽譜も売れるし、先生の給料以外の収入が見込まれたのです。「わたしはいつも、自分の力で人生を切りひらいてきたんだ！」

何よりもバッハが気がかりだったのは、息子たちの教育でした。自分が大学を卒業していないことで、就職のときに何かと不利な経験をしてきました。

息子たちを大学に入れるためにも、大学の町ライプツィヒに住みたいと思ったのです。

実は、バッハはすんなりとトーマス教会のカントルになれたわけではありません。ライプツィヒの市議会が集めた審査員十二人には、市長や校長や聖職者や音楽家がいて、カントルに「芸術家タイプ」を選ぶか、「先生タイプ」を選ぶかで争っていました。

「先生として学校の業務を真面目にこなすことが重要だ。」

「いやいや、すばらしい音楽をつくる芸術家こそ必要だ。」

「芸術家は自分の好きなことしかやらないからダメだ。」

「大学を卒業した学歴の者が望ましい。」

まず最初に六人の候補がいて、そのなかにバッハの名前はありませんでした。ドラダラと九か月も会議をしているうちに、候補者全員が断ってしまい、次の候補にあがったバッハがカントルに選ばれたのです。

もちろんバツハは「芸術家タイプ」。そのことが、このあとバツハを悩ませるさまざまなトラブルのもとになるのでした。

カントルの仕事

バツハ一家は、トーマス教会付属学校の校舎内にあるカントルの部屋に住むこととなりました。壁一枚を隔てた向こうの部屋には、寄宿生たちがひしめきあって暮らしています。

学校では五十五人の寄宿生と、貧しい家の子どもたち百人くらいの生徒が学んでいました。

「やーい、こつちだぜ!」「やめろ! 返せ、俺のペンだぞ!」

「宿題やってねえ」「教科書忘れちまったから見せろよ!」

「やべっ センコーが来た!」

「こら! 静かに! 静かにー!! まず発声練習からだ!」

「お腹が減って声が出ませーん。」

十代の男子たちが、先生の言うことをおとなしく聞くはずありません。

カントルは、月・火・水曜の九時と十二時、金曜の十二時、週七時間の音楽の授業と、週六時間のラテン語の授業を受け持つことになっています。

「音楽以外の授業をするなんて、まっぴらごめんだ!」

バツハは自分の給料で別の先生を雇って、ラテン語の授業を担当してもらいました。

「バツハは勝手なことばかりやって困る! だから『芸術家』を雇うのはやめたほうがいいと言ったじゃないか!」

学校側は、バツハの給料からラテン語の授業の分を減らしてしまいました。ちようどそのころ、トーマス教会付属学校では、ラテン語や理系の科目を増やして、音楽の授業を減らす教育方針が打ち出されていたのです。

「急いで！次は結婚式に移動だ。明朝は洗礼式だ。」
 ライプツィヒの人々のかたわらには、生まれてから亡くなるまでいつも讃
 美歌がありました。

「寒い冬は葬式が多いから儲かるなあ。給料が少ない分、取り返さなくち
 や！」
 カントルは聖歌隊を率いて、亡くなった人の家の前で讃美歌を歌い、町は
 ずれの墓地まで葬列の先頭を歩き、埋葬される前にもう一度讃美歌を歌いま
 す。葬式は一日平均一〜二回。葬式の収入はカントルや生徒たちのお小遣い
 になりました。

「寒い冬は葬式が多いから儲かるなあ。給料が少ない分、取り返さなくち
 や！」
 カントルは聖歌隊を率いて、亡くなった人の家の前で讃美歌を歌い、町は
 ずれの墓地まで葬列の先頭を歩き、埋葬される前にもう一度讃美歌を歌いま
 す。葬式は一日平均一〜二回。葬式の収入はカントルや生徒たちのお小遣い
 になりました。

寄宿生たちは、学校付属の宿舎に食事付きで住めるかわりに、聖歌隊に入
 ってライプツィヒの主要な四つの教会の礼拝で歌うことが義務でした。日曜
 や祝日の礼拝はもちろん、クリスマス、復活祭、イエスの命名日、マリアの



週一曲のカンタータ

ルター派の教会の礼拝でもっとも重要なのは、聖書の物語を音楽で伝える「教会カンタータ」です。カンタータとは、数人の独唱、合唱、オーケストラとオルガンで演奏する曲で、さまざまな編成の小曲が十曲くらい連なった三十分ぐらいの作品です。

毎日曜と祝日の礼拝用に年間約六十のカンタータが必要で、それを準備するのがカントルの仕事です。

「よし！ 毎週新しいカンタータを作曲するぞ。」

バッハは新しい曲、むかし書いた曲などを組み合わせ、ライブツィヒに来て三年間で一五〇をこえるカンタータを書き上げました。

トランペットの輝かしいファンファーレに導かれて、カンタータ第一四七番の一曲目の合唱が教会に響きわたります。「♪心と口と行いと生活で心と口と、心と口と、行いと行いと、生活で♪」同じメロディをパートごとに追いかけてこするフーガという形式の曲です。

やがてヴァイオリンが奏でる美しい前奏に続いて、ソプラノ歌手が「イエスよ、道を作ってください」と歌います。そして第六曲の前奏が始まると、教会に集う人々の表情がぱっと明るくなりました。前奏は、三音ずつ連なるメロディが小さな空気の輪をひとつずつ描くように続いていきます。人々はその輪に導かれ、讃美歌「主よ、人の望みの喜びよ」に心の声を重ねます。バッハは、誰もが知る讃美歌のシンプルなメロディに、装飾的なもうひとつのメロディを美しい刺しゅうのように編み込みました。

「はい、みんなお疲れさまー！」



「わたしたちをあらゆる苦しみから救い、わたしたちのために戦ってくださいるのは誰か？」「その方はイエス・キリスト。」

カンタータの歌詞を口のなかで唱えようと、言葉のリズムがそのままメロデ

バッハは日曜の礼拝が終わって家に帰ると、ゆっくり休む間もなく、壁の向こう側の寄宿生たちが寝静まった夜、次の日曜に上演するカンタータの作曲を始めます。

昼間は学校の授業やレッスンがあるので、作曲はいつも真夜中。ローソクの灯りを頼りに、細かい五線紙に音符を書き込んでいきます。スコア（全体の楽譜）ができあがると、妻アンナ・マクダレーナや息子や弟子たちがパート譜（楽器奏者や歌手それぞれのパートを抜き出した楽譜）に書き写し、できあがった順に練習を始め、土曜に全員集まってリハーサルをして日曜本番、というスケジュールで一週間がまわっていました。



イとなって湧き出て、手がそれを五線紙に書き取っていく。バッハは自動作曲機のようにでした。

毎週カンタータを一作品仕上げるという超人的なスケジュール。今週書いた作品を演奏しながら、頭のなかでは次週のカンタータを作曲していたのかもしれない。

「今日はこの讃美歌が歌われるそうよ。」

「わたしも歌詞集を買ったわ。」

バッハは、毎週教会に集まる千人以上の市民のために、讃美歌の歌詞集を販売しました。その売り上げは自分の臨時収入となりました。

苦難つづきの毎日

ライプツィヒ



1727年～
42歳ごろ～

マタイ受難曲

ライプツィヒに来て四年。バッハは毎日忙しくしながら、大作の作曲に取り組んでいました。「マタイ受難曲」です。

受難曲とは、イエス・キリストが捕らえられ、十字架の上にはりつけにされ息絶えるまでの物語を音楽にしたもの。歌詞は、売れっ子の作詞家書いたもので、聖書のなかにあるイエスの弟子マタイが語り伝えた福音書の言葉、讃美歌、自由な詩、の三つから成っています。

ライプツィヒでは毎年聖金曜日（復活祭直前の金曜）に「受難曲」が上演されていて、市外からもたくさんの方が聴きにおとずれました。

▶ CD6

「イエス・キリストの苦しみや悲しみを、今、自分に起きていることとして描きたい！」

バツハは、人生最高の作品を書こうと意欲に燃えていました。

「十字架を背負ったキリストがよろめきながら歩いていく。重い足取りと深い痛みをあらわすには、低音から響く、厚い響きが必要だ。」

バツハは、オーケストラを二組に分けて配置し、音が左右の耳に別々に届くような立体的な響きを作り出します。そして低い音を繰り返す、肩に食い込む十字架の重さをリアルに感じさせるのです。

「見なさい！／誰を？／花婿を」 「見なさい！／何を？／我らの罪を」 キリストを見守る人々の問いと答えを、合唱で呼び交わしたい。」

バツハは、合唱団も二組使い、四方八方から歌い交わすことによって、目からも耳からも音が飛びこんでくるようにしました。

有名な場面に、イエスを裏切る弟子ペテロの話があります。

イエスが役人に捕らえられた夜、ペテロは「何があってもわたしは絶対にイエスさまについていきます。」と誓います。しかしイエスは、「いや、おまえは、わたしのことなど知らない」と三度言うだろう。」と予言します。

そのあとペテロは、捕まったイエスとの関係を問いただされ、「イエスなんて人、ぜんぜん知りません。」と三度も言ってしまうのです。はたとイエスの予言を思い出したペテロは、後悔にさいなまれ、激しく泣き崩れるのでした。

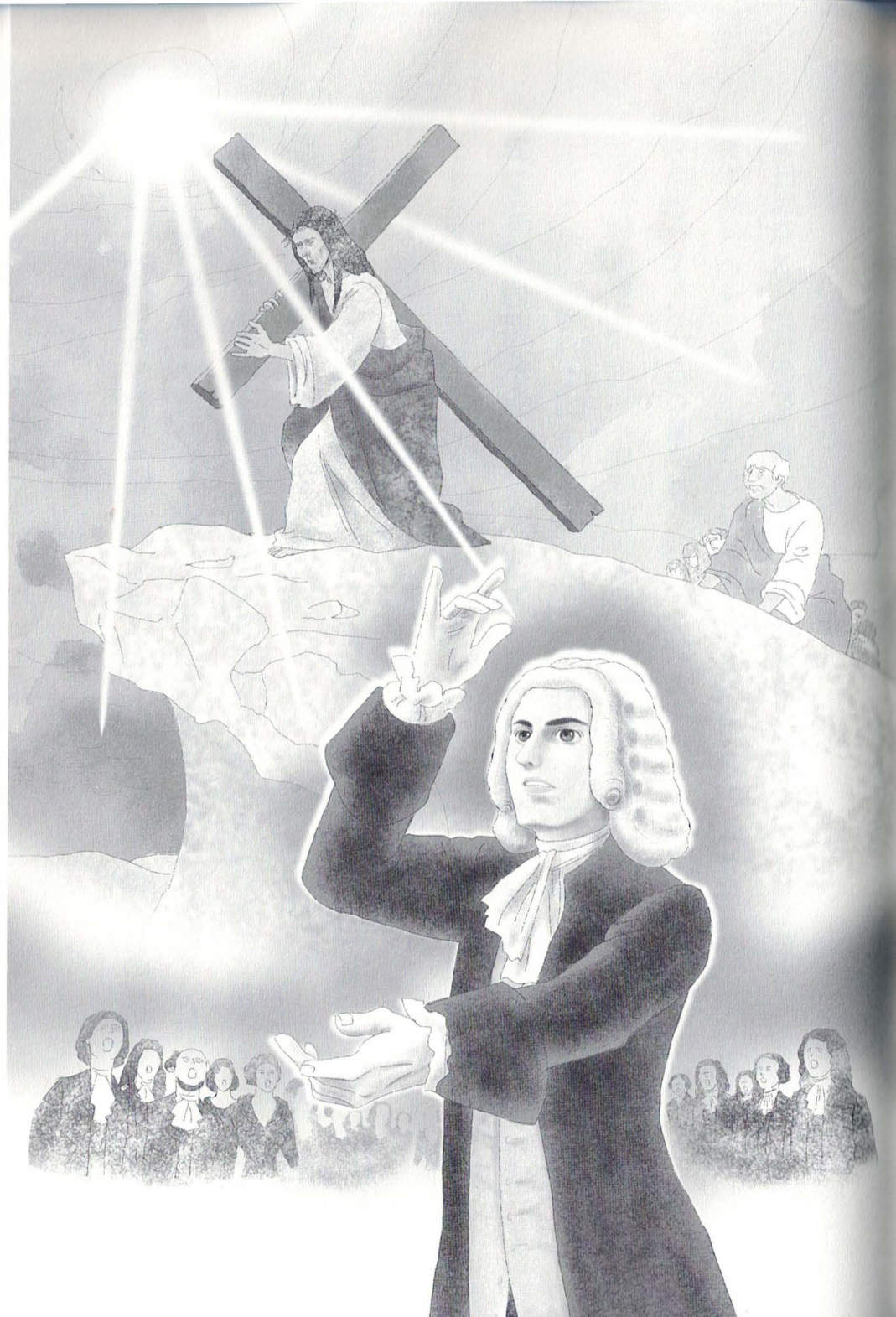
バツハは、ペテロの気持ちになりきって、とりつかれたようにペンを走らせました。

「ああ、何と人間は弱いのだろう。彼のあやまちは誰にだって起こることだ。ペテロはわたしだ。ペテロはみんなだ。彼の頬をとめどなく流れる涙をあらわすには、どんな音色がふさわしいだろうか。」

バッハは、嘆きのメロディをヴァイオリンのソロに、胸に迫る悲しみの歌をアルトの歌手にゆだねました。

「神さま、あわれんでください、どうかお赦してください。
とめどなく落ちるわたしの涙をぐらんください。
心も、目も、あなたの御前で激しく泣いているのです。
だから神さま、わたしをあわれんでください、どうかお赦してください。」

地球上には、いろいろな人間が住んでいます。神さまを信じている人もいれば、そうでない人もいます。大好きな友だちや家族に嘘をついてしまうときだってあります。人間が知らず知らずのうちに犯している罪を、バッハの音楽は、厳しく優しく、わたしたちに思い起こさせてくれるのです。



一七二七年四月十一日、バッハの「マタイ受難曲」が人前で初めて演奏されました。午後一時に演奏が始まり、終わったのは夕方五時を過ぎていました。聴きながら途中で泣き出す人、興奮して立ち上がる人、途中で帰る人、怒り出す人、さまざまでした。

「すべてを出し切った。」

演奏をし終えたバッハの顔は真っ青。体はぬけがらのようでした。

カフェでの音楽会

この初演翌日、バッハは市議会と教会の代表者に呼び出されました。

「バッハくん、昨日の音楽は何だ？ 困るねえ、あんな長い曲を書いてもらっては。」

「何度言ったらわかるんだ！ 教会では聖書の説教がメインなのだよ。音楽

は二の次だ。（だから大学を出ていないカントルはだめなんだ！）」

「市民の心を音楽で乱すことは、断じて許されない。（カントルに芸術家は不要だ！）」

バッハは、誓約書にサインをさせられました。

「わたくしバッハは、このようなドラマチックな教会音楽を二度と書かないことを誓います。」

バッハはくやしくて、はらわたが煮えくりかえりそうでした。

「どうしてこんな目にあわなければならなんだ！ わたしは最高の音楽で神さまを讃美しようとしただけなのに！」

こういう反応が関係者から来ることは予想していました。でも一人くらいは、音楽に感動して認めてくれると思ったのです。しかしそれは、芸術家バッハの甘い考えでした。音楽は誰にでも伝わるものではないのです。

「バッハ先生、マタイ受難曲、すばらしかったです！」
キルヒバッハという学生が、興奮さめやらぬ様子でバッハに駆け寄りまし
た。

「聴きながら鳥肌が立ちました！ その感動は言葉ではあらわせません。」

「ありがとうございます。若い人たちはわたしの音楽をわかってくれただろうね。」

以前からバッハは、このキルヒバッハに頼まれて、学生たちの音楽サークル「コレギウム・ムジクム」の指揮者をしていました。彼らのコンサートは大人気で、毎週金曜の夜八時から十時、年間五十回以上も行われていたのです。

会場は、ライブツィヒの中心部にあるおしゃれなカフェ。バッハにとって、純粋に音楽を愛する若者たちのために、作曲し指揮をすることはこの上なく幸せなことでした。また、カフェの支配人からは謝礼も支払われました。

「バッハ先生、明日は練習に来ていただけますでしょうか。」

「おう、学校の授業が終わったらすぐに駆けつけるから。スコアもそれまでに仕上げておくよ。」

「ありがとうございます！ パート譜は我々が手分けして作ります。」

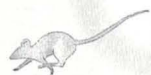
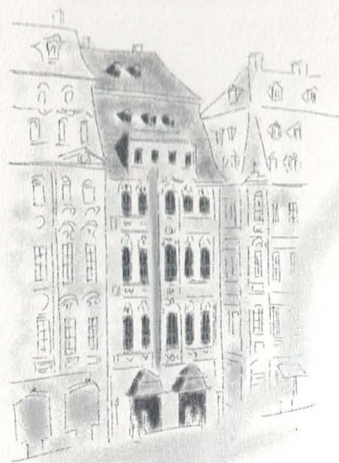
「次の新曲はウケるぞ！ 楽しみにな。」

ライブツィヒでコーヒーが大流行していたことにちなんで、バッハは、コーヒーばかり飲んでいる娘と、それをやめさせようとする父親の会話を歌詞にした「コーヒー・カンタータ」を書きました。

「♪お父さんがミガミ言わないで。あたし一日に三回コーヒーを飲まないといられないのよ。ああコーヒーはなんておいしいのかしら。」

「♪コーヒーをやめないなら、結婚もさせないし、服もアクセサリーも買つてやらんぞ！」

教会で演奏するカンタータとはまるで違って、カフェで演奏するカンター



ライブツイヒの日々

今日はトーマス教会の合唱団の新メンバーを選ぶ試験の日です。

「この子は声も良いし楽譜も読める、合格。この子は歌が上手でヴァイオリ

タにはユーモアがいっぱい。あのバッハ大先生がカフェでコンサートをして
いるという噂が広がり、金曜の夜はカフェが客であふれました。

「猫はねずみが好き、娘はコーヒーが好き。お母さんもコーヒーが好き、
おばあちゃんもコーヒーが好き。コーヒーはやめられない！」

カフェは楽しい音楽と笑顔でいっぱい。「コレギウム・ムジクム」のコン
サートでは、「G線上のアリア」の入った「管弦楽組曲」第三番や、次男エ
マヌエルとの親子共演で「二台のチェンバロのための協奏曲」などが演奏さ
れ、大いに盛り上がりました。

▶ CD7

ンも弾ける、合格。この子は声は良いが音程が悪い、不合格。この子は態度が悪すぎる、不合格。」

バツハは、ひとりひとり細かく審査した採点表を市議会に提出しました。数日後に結果が届くと、どうしたことでしよう、バツハが合格とした者がほとんど落ちてしまい、不合格にした者が倍以上も入っていたのです。

「また嫌がらせか！」

バツハは必死に怒りをこらえ、しばらく時間をおいてから市議会へ長い長い文書を送りつけました。そこには、教会という組織の問題点や、教会音楽の改善点などが、相手をキリキリと追いつめる口調で、びっしりと書かれています。これでは市議会の委員たちの怒りを買うに決まっていますが、バツハはけっして恐れませんでした。

「バツハくん、何を勘違いしているんだね？ カントルは市議会に従うものだ。給料を減額とする！」

何を言っても理解されず心がボロボロになったバツハは、ささやかな気持ちに、妻アンナ・マクダレーナに花を買って帰りました。

「ただいま。はい、プレゼント。」

「まあきれいなお花！ ありがとう……あなた、何かあったの？」

「市議会とまた喧嘩をしてしまって。給料を減らされてしまったよ。」

「芸術がわからない人には何を言っても無駄よ！ あんな奴ら、放っておけばいいのよ！ わたしはあなたとあなたの音楽を信じているわ！」

アンナ・マクダレーナはいつだってバツハの味方です。お腹には八人目の子どもがいました。

バツハの住まいから壁一枚をへだてた寄宿舎には少年たちがすし詰めになっていて、毎年のように感染症が広がり、それがバツハ家にも飛び火しました。アンナ・マクダレーナは十三人の子どもを生みましたが、そのうち

の七人が幼くして亡くなっています。そしてバッハの前妻との間に生まれた三人の息子と一人の娘もいるので、生活費も学費もまだまだかかります。

バッハ四十五歳、転職をするなら最後のチャンスです。

「そうだ、エルトマンに相談してみよう。」

少年時代、リューネブルクまでの三百キロの道を一緒に歩いて旅した友人エルトマンは、ロシア大使に出世していたのです。

就職口を紹介してほしいと、尊敬と友情の思いを込めて手紙を出しました。しかし何か月たってもエルトマンからの返事はありませんでした。

「よし、こうなったら肩書きだ！」

大学を出ていないバッハにとって、高い地位の肩書きは何よりも重要です。バッハは、当時ライプツィヒを治めていたザクセン州（ドイツ北東部）の国王である選帝侯に「宮廷作曲家」の称号をお願いする手紙と、新作の楽譜を送りました。

しかしなかなか返事は来ません。バッハのイライラがつのっていきます。

「あなた、きつと選帝侯さまはお忙しいのよ。気長に待ちましょう。」

「うるさーいっっ!! おまえに何がわかる!!」

ガラガラ・ガッシャーン!!

バッハのかんしゃくが爆発し、皿やコップが床に落とされてこなごなに割れました。家族はみんな下を向いて黙り、目で会話します。

（お父さんの怒りの虫を起こしちゃった!）

（みんなごめん! お母さんの一言がまずかったわ）

「キュルルル・チュピチュピ」

鳥籠のムクドリも驚いて鳴いています。

「けんかしちゃだめって鳴いてるよ」

アンナ・マクダレーナとの一人目の息子のゴットフリート・ハインリヒには知的障がいがありましたが、小鳥の言葉がわかったのです。

「大声を出してすまなかった。」

「お父さん、どいてください。」

床に飛びちった食器の掃除をするのはいつも長女の役目でした。

それから数年後、ようやくバッハのもとに「宮廷作曲家」の称号が届きます。この肩書きの力は強く、市議会はバッハに何も言わなくなりました。

人生の終わりに

ライフツィヒ

音楽の捧げもの

60歳を過ぎたバッハは、カントルの仕事から距離を置くようになり、ドレスデン、ベルリン、カッセルなどドイツ各地にオルガンの鑑定や演奏に出かけました。今や大音楽家バッハの名前はドイツ中に知れわたっていたのです。「うちの息子をよろしくお願いします。まじめな性格でオルガンも得意です。」

バッハは息子たちを大学に入れ、良い就職先を探し、音楽家として自立できるように力を尽くしました。

その甲斐もあって、フリーデマン、エマヌエル、フリードリヒの三人の



1747年～
62歳ごろ～

息子たちは、音楽家として立派な地位につき、バッハが五十歳のときに生まれた末息子のクリスチャンも、優れた才能をあらわしていました。のちにクリスチャンは、モーツァルトに大きな影響を与える音楽家となります。

次男エマヌエルは、音楽好きで有名なプロイセン国王フリードリヒ二世に仕え、ベルリンに住んでいました。

「お父さん、国王がぜひ宮廷にお招きしたいとおっしゃっているんだ。」

ちょうどプロイセンがザクセンと戦争して勝利をおさめ、ライプツィヒはプロイセンに占領されたところでした。エマヌエルは、ライプツィヒにいる父を国王に紹介するのは今しかないと思ったのです。

バッハは長男フリーデマンを連れて、プロイセン国王の宮廷を訪問しました。

「ようこそ、バッハ先生。あなたの噂はエマヌエルから聞いているぞ。」

「ははあ陛下、恐縮でございます。最新型のピアノフォルテ（ピアノの前身）を弾かせていただけるとは、ありがたき幸せ。」

「わたしが作ったこの主題を使って、演奏してみたまえ。」

バッハは、国王の主題のメロディによるフーガを即興で演奏しました。主題のメロディが、鏡のように逆さまになったり、拡大されたり縮小されたり、複数のメロディが複雑にからみあう凝った技法のオンパレードです。

「あ、ああ、終わったかな？ 見事な演奏だ。敬意を表する。」

国王は社交辞令の感謝を述べただけでした。国王は、メロディがキラキラした心地よい音楽が好き。論理的な技法で構成されたバッハの音楽は、とても古く難しいものに感じられたのです。バッハは六十二歳、国王は三十五歳。音楽の好みに、世代の隔りがあるのは無理ありません。

バッハはライプツィヒに帰ると、宮廷で披露した即興演奏を楽譜に書き起

こし、印刷し、美しく製本し、感謝のメッセージをそえて「音楽の捧げもの」として国王に贈りました。

しかし国王からは何の返事もありませんでした。時代の流れは残酷なもの。バッハの音楽は、過去のものになりつつありました。

目の手術、そして死

大きな病気もせず、持病もなく健康だったバッハの丈夫な体も、六十四歳になるころからガクンと視力がおとろえ、細かい楽譜を書いたりする作業が難しくなってきました。市議会はチャンスとばかりに、バッハの後任のcantor（カントル）を選ぶオーディションを開き、バッハを辞めさせる準備を進めます。

「辞めるものか！ まだまだわたしは現役だ！」

バッハは、自らの作曲技法の集大成となる「フーガの技法」を書いていま

した。題名のとおり、フーガのあらゆる技法がカタログのように並んでいる曲集です。バッハは自分の音楽がもう時代遅れであることを充分にわかっていました。だからこそ人生をかけて確立した作曲技法を、歴史にしっかりと刻みたいと思ったのでしょう。

そんなとき、有名なイギリスの眼科医ジョン・ティラーが、ライブツィヒにやってくるというニュースがバッハのもとに届きました。

「みなさん、こちらのお方は、かの偉大なる名医、ジョン・ティラー博士にございます。〈視力を与える者は命を与える！〉ティラー博士は万人の命の恩人！ 目が悪くなった王女さまが、先生の手術を受けたらあら不思議！ 本が読めるようになり、顔のシワもピンと伸びて、若さまで取り戻してしまったのです！」

ティラー博士は金ぴかの馬車に乗り、十人位の助手を連れて、チラシをばらまきながら町中を練り歩いていました。新聞も「イギリス、フランス、ス

ペイン、オランダ、これまでに四四〇人以上の人がティラー博士の手術を受けて視力を回復し、一人の失敗もなかった」と報道しています。

ティラー博士の一行がバッハのもとにやってきました。

「バッハ大先生、ぜひティラー博士の奇跡の手術で、視力と命を取り戻しませんか？」

「あなた、あんなのイカサマよ！ 手術を受けるのは絶対やめてください！」妻のアンナ・マクダレーナは猛反対しました。

「そうだな……しかしわたしはまだ作曲がしたい。視力を取り戻したいんだ。」

バッハは一か八かの可能性にかけて、手術を受ける決心をしました。

一七五〇年三月二十八日、ティラー博士は、バッハの目にメスを入れました。麻酔薬もない時代、我慢強いバッハもさすがに声をあげました。

「あうううっ！ あうっ！ 痛いっ……」

手術後に消毒薬として、鳩の血と、焼いた塩と、粉末の砂糖がバッハの目に注入されました。目は治るところかさらに悪くなり、もつと見えなくなりました。ティラー博士は、四月五日に二度目の手術を行いました。「そのうち見えるようになりますから、この薬を毎日飲んでください。それではさようなら。」

博士の一行は高い手術代をふんだくって、ライブツィヒを去っていきました。

それから何日たってもバッハの目は回復せず、ついに光さえも感じられなくなり、完全に失明してしまいました。

「ああどうしてあるとき、手術を強く止められなかったのかしら。」

アンナ・マクダレーナは悔し涙にくれています。それに痛み止めの強い薬を飲み続けたので、バッハの体はどんどん弱っていきました。

「大丈夫だ、まだ耳は聴こえるし、口で話し歌うこともできる。」



体が弱り寝たきりとなったバッハは、枕元に弟子たちを呼び寄せて、前に書いたオルガン曲の手直しを進めました。オルガン曲の主題は、バッハの人生のかたわらにいつもあった讚美歌のメロディです。

「わたしは精一杯、生きた。」

故郷アイゼナハの両親、オールドルフの兄、死別した妻マリア・バルバラ、可愛がってくれたケーテンのレオポルト侯。目が見えないバッハのまぶたに、さまざまな町の風景や人々の顔が浮かんできます。

やがて季節は夏になりました。

「ああ見える……光が、きみの顔も……」

ある朝バッハは、アンナ・マクダレーナとはつきり目を合わせてつぶやいたのです。

「あなた！」「お父さん！」「バッハ先生！」

家族や弟子たちがバッハのベッドのまわりに集まりました。しかしその数時間後にバッハは発作を起こし、意識を失いました。

一七五〇年七月二十八日午後八時十五分、バッハは六十五歳の生涯を閉じました。

「本日、有名な音楽家、ザクセンの宮廷作曲家、ライプツィヒの音楽監督ならびにトーマス教会カントル、ヨハン・セバスチャン・バッハ氏は、著名な眼科医の手術を受けるが効果なく、六十五歳にて死亡。このたぐいまれな人物の死は、音楽界にとって痛恨の損失として哀悼の意を表する。」

翌日、市議会はバッハの後任を決める会議を開き、芸術家ではなく「先生タイプ」のカントルを選び出しました。

ただひたすら音楽に人生を捧げ、膨大な数の作品を生み出し、社会の矛盾と闘い、妻を愛し、子どもたちを立派に育てあげ、優秀な弟子たちを送り出

したバッハ。すべての音楽は、バッハに通じています。
バッハの音楽は祈りです。人は、どうすることもできない試練や運命にぶ
つかったとき、何かに祈らずにはいられません。バッハの音楽は、あなたの
悲しみや怒りや苦しみを、祈りに導いてくれるでしょう。



ここまで
「バッハを知ろう!」を
読んできたあなたへ



バッハがどんな人で、
どんな曲を作ったか、
わかったかな?

今度は、バッハの人生を、
ものがたりで読んでみよう!

裏表紙から
読んでね!



ここまで
ものがたりを
読んできたあなたへ

どの場面が一番心に残った?
どの曲を聴いてみたいと思った?

今度は、絵や写真で
バッハを知ろう!
あなたにぴったりの曲を探そう!



表紙から
読んでね!

6

バッハ資料館



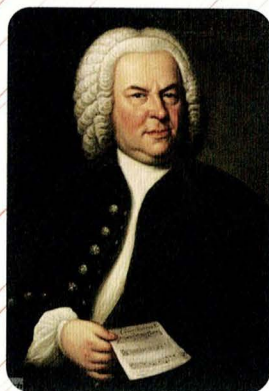
肖像



30歳のころ



35歳のころ



63歳のころ



ライプツィヒのトーマス教会前にあるバッハの像

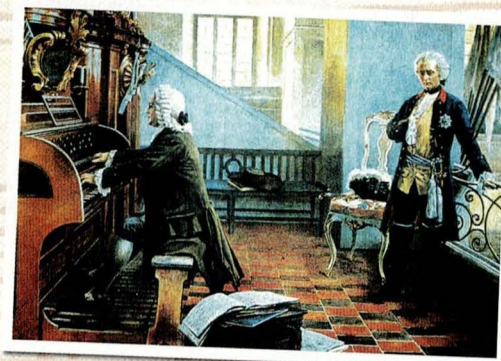


バッハのサイン



バッハが書いた「マタイ受難曲」の冒頭の楽譜

妻マクダレーナが書き写した「無伴奏チェロ組曲」第1番の冒頭。見やすく書かれている。



オルガンを弾くバッハ



バッハがカントルをつとめたトーマス教会



アイゼナハにあるバッハの生まれた家

西暦 せいれき	年齢 ねんれい (満〇歳)	バッハのこと	世界・日本の出来ごと
1720年	35歳	レオポルト侯のお供で温泉地のカールスバートに滞在中、妻マリア・バルバラが亡くなる。「無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ(シャコンヌ、他)」が作曲される。	江戸の町火消の「いろは組」が作られる。
1721年	36歳	オールドフの兄ヨハン・クリストフが亡くなる。 ケーテンの教会で宮廷歌手のアンナ・マクダレーナと再婚する。	
1722年	37歳	「平均律クラヴィア曲集第1巻」が完成。	
1723年	38歳	ライプツィヒに引っ越し、トーマス教会のカントルとなる。 ⁵ 長男フリーデマンと次男エマヌエルがトーマス学校に入学。	
1727年	42歳	「マタイ受難曲」がトーマス教会で初めて演奏される。	
1728年	43歳	ケーテンのレオポルト侯が亡くなったことで、ケーテン宮廷名誉楽長の称号を失う。	
1729年	44歳	長男フリーデマンがライプツィヒ大学に入学。 ライプツィヒの音楽サークル「コレギウム・ムジクム」の指揮者を引き受ける。	8代将軍・徳川吉宗の命でベトナムから象が輸入される。



トーマス教会とそれに付属する学校の建物

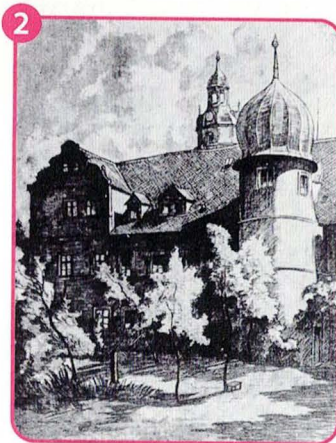
西暦 せいれき	年齢 ねんれい (満〇歳)	バッハのこと	世界・日本の出来ごと
1730年	45歳	ライプツィヒの市議会に、教会組織の問題について長い手紙を書く。旧友エルトマンに新たな就職先を紹介してほしいと手紙を出す。	
1731年	46歳	次男エマヌエルがライプツィヒ大学に入学。	
1732年	47歳	アンナ・マクダレーナとの第9子ヨハン・クリストフ・フリードリヒ誕生。	
1733年	48歳	長男フリーデマンがドレスデンのゾフィア教会のオルガニストになる。	ポーランド継承戦争(～1735)がおこる。
1735年	50歳	末息子のヨハン・クリスチャン誕生。クリスチャンはのちにモーツァルトに大きな影響を与える。	
1736年	51歳	ポーランド王・ザクセン選帝侯付き宮廷作曲家の称号を得る。	
1740年	55歳	次男エマヌエルが、プロイセン宮廷楽団の第1チェンバロ奏者となる。	オーストリア継承戦争(～1748年)がおこる。
1742年	57歳	「フーガの技法」の作曲を始める。	
1745年	60歳	初孫のヨハン・アダム・バッハがベルリンで洗礼を受ける。	徳川家重が江戸幕府第9代将軍となる。
1746年	61歳	長男フリーデマンがハレの聖母教会オルガニスト兼音楽監督になる。	
1747年	62歳	プロイセン国王のフリードリヒ2世を訪問。ポツダム宮廷で即興演奏した「音楽の捧げもの」の楽譜を贈る。	
1750年	65歳	イギリスの眼科医ジョン・テイラーによる目の手術を2度受けるが、失明状態となり薬の影響で体調がさらに悪くなる。 7月28日午後8時15分に亡くなり、ヨハネ墓地にねむる。(現在、お墓はトーマス教会に移されている。)	第115代天皇・桜町天皇崩御。 1757年 スカルラッティが71歳で、1759年 ヘンデルが74歳で亡くなる。

ねん ぴょう バッハ 人生年表

西暦	年齢 (満○歳)	バッハのこと	世界・日本の出来ごと
1685年	0歳	3月21日、ドイツのアイゼナハで父ヨハン・アンブロジウスと母エリーザベットの8人兄弟(6男2女)の末っ子として生まれる。 ^① ゲオルク教会で洗礼を受ける。	♪ 2月23日、作曲家ヘンデルがドイツのハレに生まれる。 ♪ 10月26日、作曲家スカルラッティがイタリアのナポリに生まれる。
1690年	5歳	アイゼナハのドイツ学校に入学。	
1693年	8歳	アイゼナハのゲオルク教会付属のラテン語学校に入学。	
1694年	9歳	母親が亡くなる。父親が再婚する。	
1695年	10歳	父親が亡くなる。兄ヨハン・ヤーコブとともに、オールドルフの兄ヨハン・クリストフのもとへ向かう。ラテン語学校に入学。 ^②	
1700年	15歳	友人のエルトマンとリュネブルクへ。聖ミカエル教会付属のラテン語学校に入学。少年合唱団に所属する。	



現代のアイゼナハの町の様子

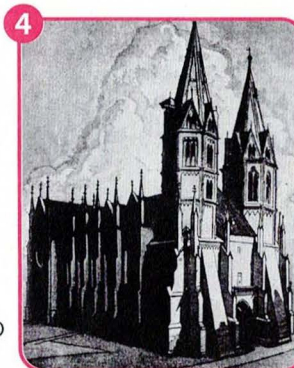


オールドルフの
エーレンシュタイン城

西暦	年齢 (満○歳)	バッハのこと	世界・日本の出来ごと
1703年	18歳	アルンシュタットの新教会のオルガニストになる。 ^③	● 江戸幕府により大石良雄ら赤穂浪士が切腹を命じられる。
1705年	20歳	ブクステフーデの演奏を聴きに、リュベックまで往復約800キロの道のりを歩く。その演奏に衝撃を受ける。	
1707年	22歳	ミュールハウゼンのブラジウス教会のオルガニストになる。 ^④ マリア・バルバラと結婚する。	♪ グレートブリテン王国成立。 ● 宝永地震・富士山宝永大噴火。
1708年	23歳	ヴァイマルのヴィルヘルム・エルンスト公に仕える宮廷オルガニストとなる。	
1710年	25歳	長男ヴィルヘルム・フリーデマンが誕生。	♪ ロンドンでセント・ポール大聖堂が完成する。
1714年	29歳	宮廷楽師長に昇進し、毎月1曲の新作を披露することになる。 次男カール・フィリップ・エマヌエルが誕生。	
1717年	32歳	ルイ・マルシャンとの即興での腕くらべのためドレスデンを訪問。ヴァイマルから引っ越し、レオポルト侯が治めるケーテンの宮廷楽長となる。	● 大岡忠相越前守が江戸町奉行になる。



当時のアルンシュタットの風景



ミュールハウゼンの
ブラジウス教会



バッハが暮らした ドイツの町



バッハはドイツ各地に住みながら音楽活動^{かつどう}を続けました。それがいつ頃^{ころ}でどんな町だったのか、地図で場所を見ながらふりかえってみましょう。

※カッコ内はバッハがいた年

1

アイゼナハ (1685年～1695年)

バッハが生まれたドイツ中部^{ちゅうぶ}の森に囲まれた小さな町。ベルリンから270キロ。高速鉄道で2時間半。今の人口は約42000人(当時の人口は約6000人)。

2

オールドルフ (1695年～1700年)

長兄ヨハン・クリストフが両親を亡くしたバッハを引き取った地。アイゼナハから東へ約35キロ。今の人口は約9600人(当時の人口は約2500人)。

3

リュースブルク (1700年～1702年)

塩づくりで栄えたドイツ北部^{ほくぶ}の都市。バッハは友人エルトマンと300キロの道のりを歩いてこの地へ。今の人口は約75000人(当時の人口は10000人超)。徳島県鳴門市と姉妹都市。

4

アルンシュタット (1703年～1707年)

バッハの父が生まれた町。バッハ一族が活動した。毛織物と小麦ビールの町としても有名。今の人口は約27000人(当時の人口は約3800人)。

5

ミュールハウゼン (1707年～1708年)

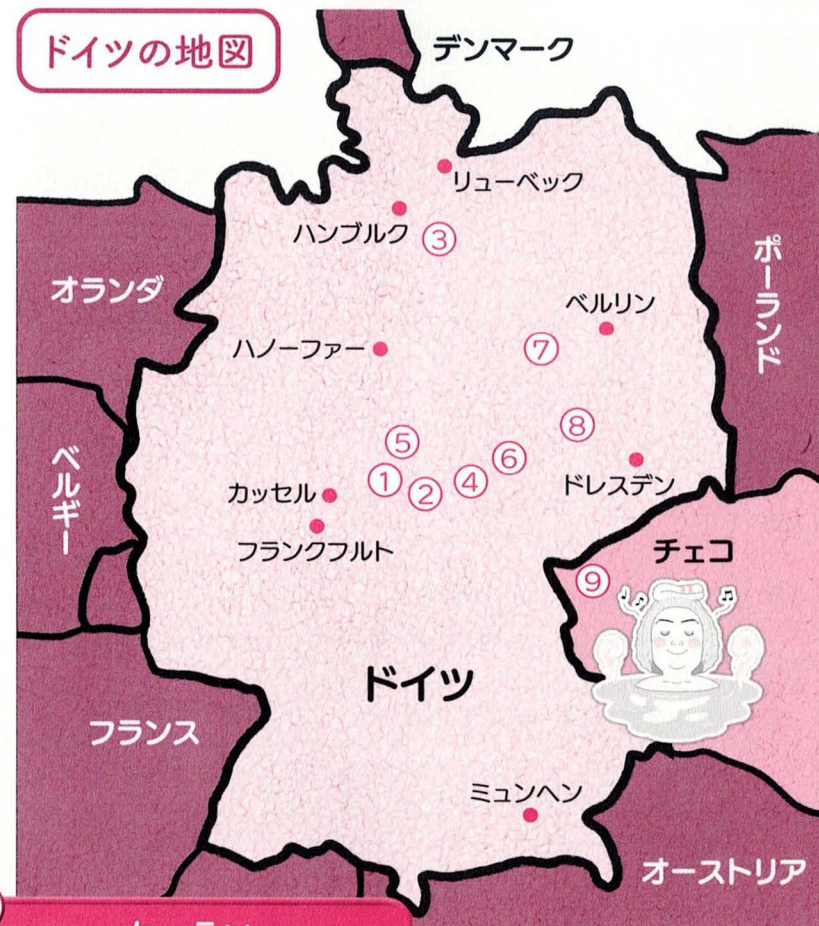
ドイツ中部^{ちゅうぶ}の都市。今の人口は約38000人(当時の人口は約7500人)。衣料品、皮革、自動車部品の産業で栄える。バッハは、この地に1年しかいなかった。

6

ヴァイマル (1708～1717年)

バッハの時代は、2人の領主が共同で治める形をとっていた(黄色い城・赤い城)。また、長男フリーデマンと次男エマヌエルがここで生まれる。今の町は世界遺産になっている。人口は約65000人(当時の人口は約5000人)。

ドイツの地図



※国境線と都市は現在のものです。

7

ケーテン

(1717年～1723年)

バッハがレオポルト侯に宮廷楽長として仕えた地。「シャコンヌ」はここで作曲された。またアンナ・マクダレーナと再婚する。今の人口は約25000人(当時の人口は約2000人)。

9

カールスバート

番外編

チェコ共和国にある温泉地。バッハの他にベートーヴェンやショパンもこの地を訪れている。

8

ライプツィヒ

(1723年～1750年)

旧東ドイツのザクセン州にあり、ヨーロッパの東西間を商品流通を通じて結びつける役割を果たしてきた都市。バッハは38歳から亡くなるまでの27年間にこの地で暮らした。今の人口は約60万人(当時の人口は約30000人)。

♫ マタイ受難曲

p.63 ▶ CD6

受難曲とは聖書のなかの、イエス・キリストが捕らえられ十字架の上にはりつけにされ、息絶えるまでの物語を音楽で表現したものです。「マタイ受難曲」は、イエスの弟子マタイが語り伝えた福音書（イエスの言葉）を主な歌詞としています。数人の独唱、2群の合唱とオーケストラによって演奏され、イエス、ユダ、ペテロなどの登場人物が語りに節を付けて歌う部分、個人的な胸の内を切々と歌う独唱、讃美歌を歌う合唱から構成され、ヴァイオリンやフルートなどオーケストラの楽器も活躍します。バッハは、聖書の登場人物を生き生きとリアルに描き、とてもドラマチックな受難曲を作曲しました。ライプツィヒの教会では毎年聖金曜日の時期に受難曲が上演され、世界中から聴衆が集まります。

♫ G線上のアリア

p.72 ▶ CD7

バッハは様々な管楽器・弦楽器のアンサンブルのための「管弦楽組曲」を4作品つくりました。ひとつの作品は5～7つの舞曲から構成され、それらは後にハイドンやモーツァルトが確立した複数の楽章を持つ「交響曲」の形式へと引き継がれていきます。「G線上のアリア」は、管弦楽組曲第3番のなかの2曲目の「アリア」のことです。もともと弦楽合奏曲ですが、19世紀のヴァイオリニスト、アウグスト・ヴィルヘルミが、この曲の主旋律をヴァイオリンの一番低い弦のG線のみで演奏できるように編曲したことから、この題名で呼ばれるようになりました。

♫ ブランデンブルク協奏曲

p.42 ▶ CD8

ブランデンブルク協奏曲は第1番から第6番まであり、それらは合奏協奏曲の形式で書かれています。合奏協奏曲とは、ソロ奏者1人とオーケストラによる協奏曲ではなく、複数のソロ奏者によるグループとオー

ケストラとがかけ合いを繰り広げる形式を指します。全6曲の大半はバッハがケーテンの宮廷に仕えている間に、優れた宮廷オーケストラの名手たちのために作曲されました。これらの曲集は、プロイセン（現ドイツ）のブランデンブルク州の貴族に捧げられたと言われていることから、この題名で呼ばれています。なかでも特に有名なのは、フルート、ヴァイオリン、チェンバロが華やかなソロを繰り広げる第5番です。

♫ トッカータとフーガ 二短調

p.25 ▶ CD9

バッハのオルガン曲といって誰もが最初に思い出すのがこの作品です。ドラマチックな出だし、オルガンの超絶技巧がたたみかけられていく前半のトッカータは聴きどころ満載。トッカータとは、演奏家が登場してまず自己紹介のように技巧を披露するための曲といったものです。バッハは並はずれたオルガンの名手で、その演奏の様子は「両手両足を信じられないほど速く交差させたり広げたりして、とんでもなく離れた音と音との間を飛びかきながら1音もミスタッチせず、すごく激しい動きなのに体の中心はまったく動かなかった」と伝えられています。オルガンの構造や機能や操作方法を知り尽くしていたバッハは、自分の手足のようにオルガンを自由自在に弾くことができたのでしょう。

♫ 目覚めよと呼ぶ声が聞こえ

▶ CD10

バッハのカンタータ第140番「目覚めよと呼ぶ声が聞こえ」は、美しく甘いメロディにあふれています。全部で7曲のうち讃美歌のメロディが第1・第4・第7曲に使われていて、独唱、重唱・合唱とオーケストラで演奏されます。特にイエスの到来を、花婿が到着するのを待つ花嫁のはなやぐ気持ちになぞらえて歌った第4曲は、前奏がCMの音楽にも使われるほどチャーミングで、とても人気があります。バッハはこの第4曲をオルガン独奏用にも編曲しました。



バッハ 名曲アルバム



p.~ は本文でその曲が出てくるページです。

♪ 主よ、人の望みの喜びよ

p.59 ▶ CD1

ピアノ編曲版で有名な「主よ、人の望みの喜びよ」は、カンタータ第147番「心と口と行いと生活で」のなかに登場する讃美歌の題名です。この曲の最大の魅力は、「主よ、人の望みの喜びよ」のメロディではなく、バッハが作曲した「前奏」にあります。愛情あふれるハーモニーの上に、三連符のメロディが美しいレース編みのようにつむがれていき、誰もがこの前奏に心をつかまれます。バッハがライブツィヒに来て間もなく、聖母マリア訪問の祝日のために作曲されました。

♪ インヴェンションとシンフォニア

p.44 ▶ CD2

ピアノを習う人が必ず一度は弾くバッハの「インヴェンション」。バッハはケーテンの宮廷楽長をつとめていた時期に、チェンバロの曲をたくさん作曲しました。「インヴェンションとシンフォニア」もその1つで、長男ヴィルヘルム・フリーデマン・バッハのレッスン用として書かれたものです。インヴェンションは右手と左手で別のメロディを重ねる二声部の曲。シンフォニアは両手で合計3つのメロディを奏で、3本の手で弾いているように聴かせる三声部の曲です。

♪ 無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ

p.47 ▶ CD3

ヴァイオリンは主にメロディを担当する楽器で、多くの場合、伴奏の

ハーモニーはピアノなど他の楽器によって奏でられます。しかしヴァイオリン1つだけでメロディと和音の両方を弾くことに挑戦したのが、この「無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ」です。1人のヴァイオリニストが、複数の弦で同時に2つのメロディを弾いたり、広い音域を猛スピードで行き来することによって、まるで2人か3人のヴァイオリニストが弾いているような超絶技巧を繰り広げます。なかでも「パルティータ（組曲）」第5番の最後の楽章「シャコンヌ」は、無伴奏ヴァイオリンというジャンルの最高傑作といわれています。

♪ 平均律クラヴィーア曲集

p.44 ▶ CD4

平均律とは、「ドレミファソラシド」の1オクターブのなかを12等分の音程に分けた音律のことです。バッハはいつも自分の作品を論理的に整理し、カタログにまとめることを目指していましたが、この曲集も、鍵盤楽器を学ぶ人や教える人のために、12音すべての長調と短調による24の練習曲のカタログとして作ったようです。それぞれの曲は、自由な形式の「プレリュード（前奏曲）」と、複数のメロディを追いかけてこしながら絡ませていく「フーガ」とのセットになっています。

♪ 小フーガト短調

▶ CD5

バッハは生涯を通じて、オルガン奏者・クラヴィーア（鍵盤楽器）奏者として活躍しました。その当時オルガンやクラヴィーアは、合奏の土台を支える伴奏パートを担当する楽器でしたが、バッハは演奏の技術や表現力をぐんと発展させて、ソロのオルガン曲を数多く残しました。フーガとは、主題のメロディを複数のパートで追いかけてこしながら、調を変えたり間を詰めたりして、最後に向かって盛り上げていく形式のことで、バッハが最も得意とするものでした。「小」と付けられているのは、同じト短調の「幻想曲とフーガ」という大曲と区別をするためです。





バッハ 音楽チャート



質問に答えて、
今のあなたに
ぴったりの曲を
探そう！

START

年上の兄弟がいる？

- A. いる
- B. いない



食べたいおやつは
どっち？

- A. ポテトチップス
- B. アイスcream



出かけるなら
どっち？

- A. 遊園地
- B. デパート

A

B

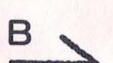


プレゼント、
もらうなら
どちらがいい？

- A. 大きな箱
- B. 小さな箱

A

B



夢を見たりする？

- A. よく見る
- B. ほとんど見ない

A

B

今のあなたの
気持ちは？

- A. おだやか
- B. ワクワクしている

A

B

住むとしたら
どっちがいい

- A. 宮殿
- B. 教会

A

B

どちらの教科が
得意？

- A. 算数
- B. 国語

A

B

好きな飲み物は？

- A. 紅茶
- B. コーヒー

A

B

どの曲にたどり着いたかな？
次のページや付属のCDで、曲について知ろう！

主よ、人の望みの
喜びよ

ブランデンブルク
協奏曲第5番

トッカータとフーガ
二短調

目覚めよと
呼ぶ声が聞こえ

コーヒー・
カンタータ



バッハが好きな飲み物は？





バッハの まわりの人物たち

家族



お父さん
町の音楽家



お母さん
家族を支えた



ヨハン・クリストフ
一番上のお兄さん



ヨハン・ヤーコブ
3歳上のお兄さん



マリア・バルバラ
最初の妻

♪バルバラとの間に生まれた子ども

◆カタリーナ・ドロテア・ヴィルヘルム・フリーデマン・マリア・ソフィア・ヨハン・クリストフ・カール・フィリップ・エマヌエル・ヨハン・ゴットフリート・ベルンハルト・レオポルト・アウグストゥス



アンナ・マクダレーナ
2番目の妻

♪マクダレーナとの間に生まれた子ども

◆クリスティアーナ・ソフィア・ヘンリエッタ・ゴットフリート・ハインリヒ・クリスチャン・ゴットリーブ・エリーザベト・ユリアーナ・フリーデリカ・エルネストゥス・アンドレアス・レギーナ・ヨハンナ・クリスティアーナ・ベネディクタ・ルイーザ・クリスティアーナ・ドロテア・ヨハン・クリストフ・フリードリヒ・ヨハン・アウグスト・アブラハム・ヨハン・クリスチャン・ヨハンナ・カロリーナ・レギーナ・スザンナ

たくさんの
子どもがいたバッハ。
男子は11人いて
成人したのは6人、
女子は9人で
成人したのは4人
でした。

特に有名な四兄弟



フリーデマン
1710年～1784年



エマヌエル
1714年～1788年



フリードリヒ
1732年～1795年



クリスチャン
1735年～1782年

音楽家



パッヘルベル
「カノン」を
作曲した



ヴィヴァルディ
イタリアの作曲家
ヴァイオリニスト



ブクステフーデ
ドイツ最高の
オルガニスト



ルイ・マルシャン
フランスの
有名な鍵盤奏者

貴族



エルンスト公爵
ヴァイマル公国の
黄色い城に住んだ



アウグスト公爵
赤い城に住んだ
ダンスが好き



レオポルト侯爵
いろいろな
楽器を演奏する



影響を受けた人物



ルター
宗教改革を行い、
讃美歌をたくさん作った



ヘンデル
(1685年～1759年)
「メサイア」はとても有名な作品



スカルラッティ
(1685年～1757年)
「猫のフーガ」が有名

バッハの子どもたち

バッハには、最初の妻マリア・バルバラとの間に7人、再婚したアンナ・マクダレーナとの間に13人の子どもがいました。なかでも四兄弟は活躍し、バロック時代と古典派をつなぐ時代を生きました。

バッハとヘンデル

1685年にドイツで生まれた2人。バッハがドイツ国内で活動する一方、ヘンデルは、イタリアやイギリスで名声を高めるなど、国際的に活躍します。どこかで2人が会うことはありませんでした。

バッハは髪にパーマをかけていた？(表紙を見てみよう)

著者

新井鷗子(あらい おーこ)

東京藝術大学音楽学部楽理科および作曲科卒業。NHK教育番組の構成で国際エミー賞入選。これまでに「題名のない音楽会」「読響プレミア」「東急ジルベスターコンサート」等の番組、コンサートの構成を数多く務める。東京藝術大学にて、インクルーシブアーツ研究リーダーとして一本指で弾ける楽器「だれでもピアノ®」の開発に携わった。著書に「おはなしクラシック」(アルテスパブリッシング)、音楽家ものがたり「ベートーヴェン」「モーツァルト」「ショパン」(音楽之友社)等。横浜みなとみらいホール館長、東京藝術大学客員教授、洗足学園音楽大学客員教授。

イラスト

千原櫻子

ブックデザイン・組版

森川雄司(クレアレスタ)

編集協力

広瀬大介

CD制作

ユニバーサル ミュージック合同会社

CD付き 音楽家ものがたり

バッハ 音楽に人生を捧げた仕事人

2023年1月5日 第1刷発行

著者 新井鷗子

発行者 堀内久美雄

発行所 株式会社 音楽之友社

〒162-8716

東京都新宿区神楽坂6-30

電話 03(3235)2111(代)

振替 00170-4-196250

<https://www.ongakunotomo.co.jp/> ⑦

Printed in Japan

©2023 by Oko Arai

印刷 藤原印刷

製本 ブロケード

本書の全部または一部のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。また、購入者以外の代行業者等、第三者による本書のスキャンやデジタル化は、たとえ個人や家庭内での利用であっても著作権法上認められておりません。ISBN978-4-276-22803-0 C8073 NDC762
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

【館外貸出可能】

※本書に付属のCD-ROMは、図書館およびそれに準ずる施設において、館外貸出しを行うことができます。



館外貸出可



もくじ

バッハを知ろう!

- 1 バッハの
まわりの人物たち ▶▶▶ 4
- 2 バッハ
音楽チャート ▶▶▶ 6
- 3 バッハ
名曲アルバム ▶▶▶ 8
- 4 バッハが暮らした
ドイツの町 ▶▶▶ 12
- 5 バッハ
人生年表 ▶▶▶ 14
- 6 バッハ
資料館 ▶▶▶ 18

バッハを知ろう!

♪プロフィール

ヨハン・セバスチャン・バッハ
1685年3月21日 ドイツのアイゼナハ生まれ
身長は180cmくらい、広げた手の幅は25cmほどで、がっちりとした体格だった。最初の奥さんが亡くなったあと再婚し、子どもは全部で20人

バッハって
どんな人?

家族

お父さん、お母さん、お兄さんとお姉さんが7人(成人するのは3人)、8人兄弟の末っ子

好きなもの

肉(牛肉・ソーセージ、ハムなど)、
コーヒー、ワイン、
ビール

性格

まじめで働き者、音楽には厳しく頑固な一面も

特技

歩くこと(コンサートを聴きに行くために往復約800kmの道のりを徒歩で移動する)

エピソード

♪学校の成績がとてもよかった
♪少年時代はきれいなソプラノの声をしていた

